

姉欲しとおもひし頃の吊しのぶ

藤田湘子

鉢山町の社宅で育った私は、近所の人たちが山からシダの一種のシノブを採ってきて、それぞれ工夫した「釣しのぶ」を作り、涼を得ようと風鈴に並べて窓際にぶら下げている光景をよく眼にした。

伊勢物語、在原業平の「春日野のわかむらさきの摺衣しのぶの乱れかぎり知られず」の「しのぶ草」とは、このシダであつたかと、百人一首、源融の「陸奥みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに」の歌と共に記憶している。

湘子が「姉欲しとおもひし頃」と、真実思つたのかは定かではない。しかし、誰にも言えぬ深い悩みが在り、相談相手をと、ふと思つたかもしれない。忍ぶ恋など和歌の題材、もつと現実的な悩みだろうか。

1984年（S59.06作）第七句集『去来の花』 鑑賞・轍郁摩